

青梅市文化財ニュース

第461号

令和8年3月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

早春の畑の植物

畑の植物といっても、栽培している野菜などの事ではなく、俗に雑草といわれる植物の事。

節分の日翌日は二十四節気の中の「立春」である。二十四節気というのは一年を二十四の季節に分けてそれぞれ名前を付けたものである。大体十五日周期で季節の呼び方があり、立春の次は雨水、次は啓蟄、春分、清明と続く。

2月4日の立春は「春」という字がつくが、まだまだ季節的には冬の様相である。今年の2月9日は、150年ぶりに市内の最低気温が更新(-10.3℃を記録)された程。

「雨水」は雪が雨に変わり、氷が解け始めるころということで植物も幾分変化してくる頃である。「啓蟄」は土の中にいる虫たちが、「暖かくなってきたかな？」と感じて土から這い出して来る頃という時期である。この頃になると、今までロゼット状態（注1）であった植物たちも、茎をのばして成長してくる時期となり、それまであまり目立たなかった畑も草が目につくようになってくる。

写真が少し見にくいかわかるが、畑にはびこる植物たちを紹介する。雑然と生えているので雑草というのかもしれないが、これからの季節、彼らが活発に繁殖していく季節である。

「ホトケノザ」

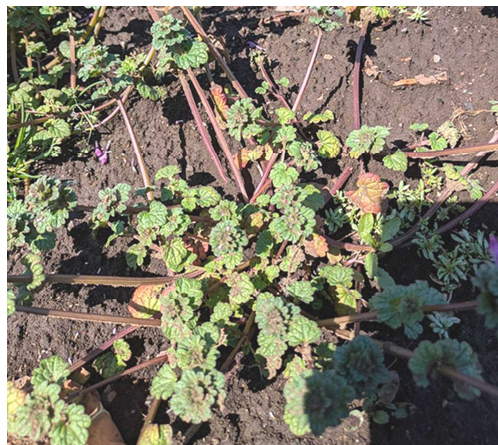
取らないでそのままにしておくと、畑が一面紫の絨毯になってしまう。春の七草の「ホトケノザ」と名前は同じだが、まったくの別物。

「ゴギョウ」

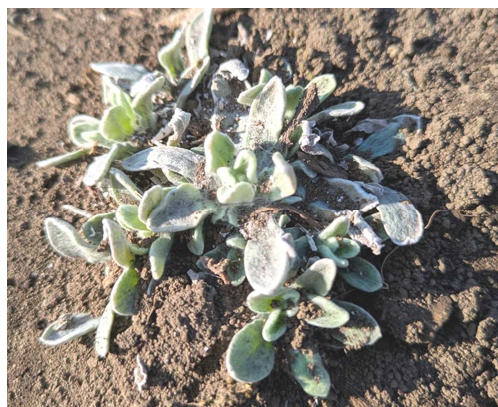
「ハハコグサ」の別名を持つ春の七草の一つ。葉の周りには綿毛が生えているように見える。この時期にはまだ茎を伸ばしていないが、成長すると小さな黄色い花をつける。

「オオイヌノフグリ」（写真は裏面左側）

越年草。秋に芽を出して他の植物が繁茂しない冬に横に広がって育ち、早春に小さな青い多数の花をつけ、春の終わりには枯れてしまう。夏の間は種子で過ごす。寒さに耐えるため、細胞内の糖濃度を高める機能を持つ。



ホトケノザ



ゴギョウ



オオイヌノフグリ



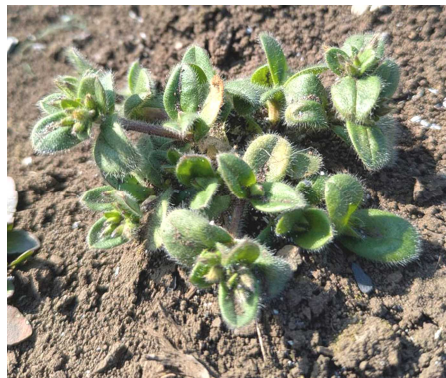
ヒメオドリコソウ

「ヒメオドリコソウ」

葉の上部に小さなピンク色の花をつける。明治時代中頃に日本に入ってきた、ヨーロッパ原産の帰化植物。



スズメノカタビラ



オランダミミナグサ

「オランダミミナグサ」

ナデシコ科耳名草属の植物。ヨーロッパ原産で、暑さ寒さ共に強いため、繁殖力が強い。

秋に発芽してそのまま越冬し、4月～初夏に白い小さな花をつける。

「スズメノカタビラ」

イネ科イチゴツナギ属の単子葉植物。秋から生えているが目立たず、春になると緑色が増えてきて目立つようになる。



ヤエムグラ



ナガミヒナゲシ

「ナガミヒナゲシ」

地中海沿岸が原産で、発芽適温が7℃～25℃と広く、1個体で15万粒程の種子を産するため繁殖力が旺盛。近年よく目立つ雑草の一つ。くすんだ赤橙色の花をつけるので目立つ。

「ヤエムグラ」

「八重むぐら茂れる宿の寂しさに、人こそ見えね秋は来にけり」と百人一首にも歌われている。

小さな棘があり、「ひっ付きむし」の異名がある。服などによくつくため、この草を服につけて遊んだ記憶を持つ方も多いと思う。

畑には雑草といわれるような草が多く生えている。紙面の都合でこれしか紹介できなかったが、まだまだ多くの種類の草が生えている。スマホをお持ちの方なら「レンズ」なる無料アプリもあるので、草取りの傍ら名前が分からなかったら写真に撮り、調べてみるのも植物の知識を増やす上で楽しいかもしれない。

注1 ロゼット状態：葉を広げて地面に張り付くような状態で寒さや乾燥から身を守る状態の事
(文責 神森 正)